

膳をすゆるなり、孟御膳をおものときよむ也、つねの御膳なり、大床子ををきて、其上に御膳をたてまつる也、日の御膳と號す、略

〔空穂物語嵯峨の院二〕おまへにしるかねのまがりなどとりいで、おものかしがせ、おまへのくちきにおびたるくさひらども、あついで物にせさせ、にがたげなどてうじて、しろかねのかなまりにいれつゝまいれば、略

〔枕草子十二〕いびにくきもの

たくみの物くふこそいとあやしけれ、新殿をたて、東のたいだちたる屋をつくとて、たくみどもゐなみて物くふを、東おもてに出ゐて見れば、まづもてくるやをそきとする物とりて、みなのみて、かはらけはつゐすべつ、つぎにあはせをみなくひつれば、おものはふようなめりと見るほどに、やがてこそうせにしが、二三人ゐたりしものみなさせしかば、たくみのさるなめりと思ふ也、あなもたいなことゝもや、

〔榮花物語初花〕かくいふ程に、御五十日、霜月元寛弘のついたちの日になりければ、略御帳の

東のかたのおましのきはに、北より南のはしらまで、ひまもなう御几帳をたてわたして、みなみおもてには、御前のものまいりすべたり、にしによりては、大みや藤原彰子のをも、れいのぢんのおしきになにくれどもならんかし、わかみや一條の御前のちるさき御臺六、御さらよりはじめ、よろづうつくしき、御はしのだいのすはまなどいとおかし、

〔侍申群要三〕役供事供時、開殿上、小月、跪、御膳、選立云、御膳

〔書言字考節用集服六〕御臺僧家、御臺飯、略語也

〔大和本草四〕遺釀、糲飯

國俗飯ヲ御臺ト云、榮花物語、増鏡ナド古キ草詞ニモ見エタリ、貴人ノ飯ヲ臺上ニ置テ進ムル故